

Title	トマス・ロバート・マルサスの貨幣理論
Sub Title	T. R. Malthus's monetary theory reconsidered
Author	佐藤, 有史(Sato, Yuji)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2001
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.94, No.3 (2001. 10) ,p.413(39)- 438(64)
JaLC DOI	10.14991/001.20011001-0039
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20011001-0039">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20011001-0039</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## トマス・ロバート・マルサスの貨幣理論\*

佐藤 有 史

### I. はじめに

マルサスの貨幣理論は、ヴァイナー（Viner 1924）による再発見<sup>(1)</sup>以来、主に彼の1811年『エディンバラ・レビュー』第1論文（Malthus 1811a）に基づいて、厳格な地金主義者リカードとは対照的な「穏健な地金主義的立場」（e.g., Viner 1937, 141; O'Brien 1975, 149）と形容されてきた。だが、このようなヴァイナーによって主導されてきたマルサス貨幣理論の解釈史には問題がない訳ではない。なぜなら、ヴァイナーによる解釈には、ヴァイナー自身が対峙していた論争的背景——ハーヴァード学派によるヒューム的な物価・正貨流出入メカニズムの擁護の試み——抜きには理解できない諸要素があったからである。

他方で、ケインズ（Keynes 1972）以来通俗的に描写される「貨幣的経済学者」マルサスという像の流布は、マルサス貨幣理論の研究史の実像とかけ離れたものだといわざるを得ない。なぜなら、マルサス貨幣理論の研究史の顕著な特色は、その研究二次文献の圧倒的な量的少なさにあるから<sup>(2)</sup>だ。だがそれと同時に、このような研究史の状況はマルサス貨幣理論の特徴を暗に示すものだと

---

\* 本稿は草稿段階で、マルサス学会第11回大会（2001年5月12日関東学院大学）および経済理論史研究会（2001年6月16日明治大学）で発表された。貴重なご批評を賜った諸先生・諸姉、コメンテーターの労をとって下さった水田健氏（東日本国際大学）、本誌匿名審査者の方々に感謝申し上げます。いうまでもなく、なお残る誤りは筆者のものである。

(1) マルサス貨幣理論の「再発見」のもう1つの考えられる経路は、1931年初版のハイエク（Hayek 1935）による強制貯蓄論史の素描である。だが、彼によるマルサスの取扱いははるかに断片的なものだった。

(2) 私は、近年におけるマルサス貨幣理論の大部の研究であるホルンダー（Hollander 1997, 630-735）に対してすら、その範囲の限定と処理の仕方とに対して若干不満を覚える。なぜなら、彼は必ずしも『初版・人口論』以来のマルサスの貨幣思想の発展を包括的に示し得ているとは私には思えないからだ。だが、彼のこのような処理の仕方には、対峙すべき研究文献の圧倒的な少なさも反映しているのは疑いない。

いえるだろう。マルサスは結局、彼の経済学上の主著『経済学原理』（1820）に独立した「貨幣」章を設けなかった。それどころか、次のような主張がなされるのには、理由がない訳ではなかった。

マルサスは、最初はケインズ、次いで後の解釈者たちによって、貨幣的分析を発展させたと考えられてきた。これによって、彼はセー法則の支持者たちの物々交換分析の弱点を暴くことができたというのである。だが、マルサスの主著のどれにも体系的な貨幣的分析は全く含まれていなかったし、貨幣の重要性についての彼の主張は、古典派分析はそれなしでは記述的に不十分であると指摘する域をほとんど出なかった。本質的に彼の分析は、セー法則の支持者たち……と同じくらいに非貨幣的であった。(Sowell 1972, 96)

このような主張がなされる背景には、結局彼は首尾一貫した貨幣理論を構築し損ね、自らの体系に貨幣理論を整合的に組み込み損ねたという事実が確かにあった。そしてこの事実こそが、これまで研究者たちに彼の貨幣理論の真剣な再検討を躊躇させてきたり、その実質に対して懐疑を抱かせてきたりした真の理由だといえるだろう。

だが、この貧しい研究史はまた、ヴァイナーによるマルサス解釈が研究者間で今日まで唯々として広く受容され続けてきた一因をなすだろう。本稿はこの欠を埋めようとする試みである。私は、マルサス貨幣理論の実像を提示し、かつヴァイナーによる解釈の妥当性を問う作業は、1人マルサスに限らず古典派貨幣理論全般の正確な発展史を描く上で不可欠なものになるだろうと信ずる。

本稿の内容は以下のとおりである。第II節では、貨幣数量説解釈の予備的注意が述べられた後に、マルサスは、『初版・人口論』から『経済学原理』以前にかけて外生的貨幣供給の増減に基づく数量説を展開した一方で、それと同時に数量説と矛盾する総貨幣供給一定の仮定に基づく分析を救貧法批判で展開せざるを得なかった理由が示される。第III節では、地方銀行のインフレーションの責任問題と国際調整論におけるマルサスの立場が明らかにされ、ヴァイナーによるマルサス「再発見」の内実が正確に示される。第IV節では、時を経て変化したマルサスの地金の価値評価と貨幣理論の主題とが描写される。そして最後に、本稿で得られた諸結果の俯瞰と若干の所見とが示されるだろう。

## II. 貨幣数量説

### II. 1 予備的注意

およそ過去四半世紀の貨幣理論史研究の進展を踏まえながら、ゴウメズは述べる。

……貨幣理論には2種がある——1つは、国際収支のマネタリーな理論と関連する貨幣の「古典派理論」と呼ぶことができるかもしれないものであり、もう1つは、物価・正貨流出入メカニズムと関連する貨幣数量説である。……区別の要点は、数量説的推論（貨幣と国内物価との間には厳密な比例性があるという観点）は、金鉱と国際的な正貨流出入とを通じて内生的に供給される商品貨幣のケース、つまり古典的金本位制のような純粋金属通貨のケースでは適切ではないということだ。(Gomes 1993, ix)

古典派貨幣理論においては、貨幣本位金は他の任意の商品と同様に利潤率に反応しながら民間部門で生産される一商品であり、各国貨幣供給はこの外生的に与えられた本位の価格（国内通貨タームでの金の鑄造価格）に縛りつけられている。他方、数量説においては金属貨幣は不換紙幣と同一視され、貨幣は体系に外生的に導入されるし各国物価水準はこの外生的に創造された貨幣供給に依存するとされる。この2つの貨幣理論の相違についての理解は、種々の立場の相違を孕みつつ急速に普及してきたとはいえ、まだ完全に一般的認知が得られているとはいえない<sup>(3)</sup>ようであるから、ここで数量説について若干の注意を述べておくことは適切だろう。

第1に、数量説は、「ヒュームが一夜にしての貨幣の消滅の諸結果を熟考して以来……〔貨幣供給の外生的な〕所与の変化を出発点と見なす」（Girton and Roper 1978, 612. [ ] 内は追加）立場から、貨幣の中立性を論じた。すなわち数量説は、外生的な貨幣供給の変化は実物的諸変数を不変のままにして物価水準のみを変化させるとしたのである。だが、諸国が自国通貨を金に固定する金本位制のもとでは、例えば貨幣供給の初期的増加は、金の非貨幣的用途へのシフトおよび金の対外流出、あるいはその一方を招くだろう。これは貨幣供給の外生的変化の仮定に矛盾する。それゆえ古典派にとって、数量説による貨幣の中立性の提唱は、その外生的貨幣供給の仮定のゆえに擁護できない<sup>(4)</sup>。

第2に、20世紀初頭の健全通貨論者にして熱烈な金本位主義者であり、強固な「反数量説」論者であったJ.L. ラフリンが主張したように、19世紀における数量説論者はしばしば熱心なインフレーションリストであった。数量説論者は、貨幣供給の増加は、諸商品に対して一層多くの貨幣が提供されるようにするので諸商品に対する需要の増大をもたらすだろうと主張した。そして数量説論者は、ヒュームの外生的な「一夜にしての奇跡的な貨幣の増減」を可能と考えたので、高物価＝好景気の実現のために貨幣供給増を求める種々のインフレ案を提案したのである。19世紀後半における世界中での広範な複本位主義運動はその1つの現れであった。ヒュームが外生的な貨幣供給増による物価上昇は経済活動水準に好ましい影響を及ぼすという連続的影響説＝「ヒューム効果」（Mayer 1980, 96）を力説していた点についてはここで詳説するには及ばないだろうが、まさに、ヒュームは彼らの運動の理論的支柱の1人だった<sup>(5)</sup>（Laughlin 1903, 392-407）。だがこの「ヒューム効果

---

(3) 例えば、もっぱら歴史的に実在した金本位制のメカニズムに沿って古典派理論、特にリカードウのそれと数量説との違いを描写するマルクツツォ＝ロッセリ（Marcuzzo and Rosselli 1991, esp. 128-51）と、競争的銀行システムにおける兌換貨幣に基づく古典派理論と数量説との違いを強調するグラスナー（Glasner 1989; 2000）とを比較せよ。私は別稿で、ヒュームの数量説とスミスの貨幣理論との違いを明確にし（佐藤 2002）、また非数量説的なりカードウの貨幣理論を提示してきた（佐藤 1999）。

(4) 古典派によれば、兌換銀行券発行による貨幣供給増は、金紙代替メカニズムを通じて金の対外流出と実物資本の対内流入とを招くだろうが、しかしこれによって国内物価水準が上昇することもなければ、世界市場における諸商品の相対価格も変化することはないだろう。

果」は、H. ソートンによる批判 (Thornton 1939, 238n./訳 263) 以来周知のように、ヒュームと彼に従う数量説論者たち自身が開放経済における国際調整として主張した物価・正貨流出入メカニズムと深刻に自己矛盾をきたしたのである。そしてスミスやリカードといった古典派は、外生的な貨幣供給増による一国の物価水準の騰貴も、物価・正貨流出入メカニズムも認めることはなかった。

なるほど I. フィッシャーは、数量説をインフレーションニズムの汚名から「救い出すために」(Laidler 1999, 183)、厳密な比例性命題・中立性命題として数量説を再構築しようとした。だが彼も結局、外生的貨幣供給の仮定から出てくる上の数量説の論理的諸欠陥を免れることはできなかった (Girton and Roper 1978, 605-14; Humphrey and Keleher 1982, 190-92)。それゆえ、数量説における相互に矛盾し合う貨幣の中立性命題、ヒューム効果、物価・正貨流出入メカニズムの主張は、多少なりともヒューム以来の (少なくともフィッシャーにまで至る) すべての数量説論者に共有された、貨幣供給を「外生的と見なす理論演習」(Girton and Roper 1978, 614) から出来た 3 つの系論だったのであり、そして古典派はそれらをすべて否定したのである。私は、本節の残りの部分で貨幣の中立性命題とヒューム効果とに関わるマルサスの数量説を取り上げ、彼の物価・正貨流出入メカニズムの主張は第 III 節で考察することにする。

## II. 2 貨金基金説：貨幣の中立性命題

マルサスは地金論争のさなかに、1811年第 1 論文の冒頭部分で次のように述べた。

あらゆる種類の流通媒介物の価値は、他のあらゆる種類の商品と同じように、信頼にも内在的用途にも関係なく、必然的に需要と比べて過剰であれば下落し、不足であれば上昇する……。この学説は、疑いなく経済学のすべての上部構造がその上に構築される基礎である需要供給の一般原理から直ちに導かれる。(Malthus 1811a, 22-3/訳 (1) 80)

この主張は、19世紀を通じて用いられることになる数量説の定義に一致する<sup>(6)</sup>。だから、1811年におけるマルサスの立場を数量説 (中村 1975, 17) とすることには、これまでほぼ異論がなかった。だがそれ以前に、マルサスは『初版・人口論』以来、貨幣の中立性命題によってその後の貨金基金説における数量説の利用に道を拓いていたのである。

マルサスは『初版・人口論』において、食糧＝貨金基金に立脚した厳格な貨金基金説を救貧法批判の論拠として用いていたことは、既にわが国でも広く認められつつある (渡会 1997, 9; 羽鳥 1999, 9)。だが数量説との関連で注目すべきは、マルサスはその批判装置として、貨幣支出に対す

---

(5) 例えば、19世紀末のアメリカの代表的数量説論者にして熱心な複本位主義者 F.A. ウォーカーによるヒュームと彼の連続的影響説との手放しでの称揚を見よ (Walker 1878, 79-94)。

(6) 「……著述家たちの中には、数量説は需要供給の一般原理の応用に過ぎない (従って、帰納的検証によっては反証できない) と主張する人々もいる……」(Laughlin 1903, 243)。

る食糧供給の過度の非弾力性を強調しつつ、貨幣支出は実物的産出に影響を与えないという中立性命題を用いていたという事実である。<sup>(7)</sup>

どんな国においても、食糧の量が多年にわたって同一のままであると仮定すれば、この食糧が各人の特許証の価値、すなわち、彼がきわめて一般に求められているこの商品に支出する余裕のある貨幣額に従って、分配されなければならないことは明らかである。……もし富者が自分自身の食卓を削減することなく、寄付をし、50万人に1日5シリングを与えることとなるとすれば、これらの人々は当然もっと安楽に生活し、より多量の食糧を消費するであろうから、他の者が分け合う残りの食糧は少なくなるであろうこと、……同じ数量の銀はより少量の生活資料しか購買しないであろうことに、何ら疑いは存在し得ない。……食糧価格の騰貴は、生活資料よりも速い人口の増加のためか、あるいは社会の貨幣の配分の変化のためか、そのいずれかのために生じるであろう。……イングランドの諸教区法が食糧価格を騰貴させ、そして労働の実質価格を低めるのにあずかって力があつたことに、何の疑いもないと私は思う。(Malthus 1798, 32, 34/訳 60-61, 63. 強調は追加)

貨幣の中立性命題に基づく救貧法批判を展開した上の文章は、『初版・人口論』における救貧法批判の支柱をなすだけでなく、(最後の1文を除いて)『人口論』最終版まで残された (James 1989, I, 348-50/訳 (III) 109-13)<sup>(8)</sup>。だから、この事実は、マルサスが生涯を通じてこの論理に少なからぬ自信を抱いていたことを示すだろう。

だがりカードウは、この『人口論』最終版まで残された「貨幣支出に対する非弾力的な食糧(貨金財)供給」という論理を、強力に批判し続けたのである。

---

(7) 『初版・人口論』に厳格な貨金基金説を見出した Vint (1994, 65-73) も見よ。この貨金基金説によると、貨幣支出の増減は実物的貨金基金の大きさに影響を与えない。マルサスは直接にヒュームの奇妙的な「奇跡的に一夜にして貨幣が増減」の論理を用いた例証を与えることはなかったが、しかし彼が提示した論拠は本質的に同じである。「人口数に比して生活資料が稀少な場合には、社会の最下層の人々が18ペンスをもっているか、5シリングをもっているかは、重要でない」(Malthus 1798, 31/訳 58)。だが後の貨金基金説論者たちは、まさにこのヒュームの論理を用いたのだ。例えばマカロックは述べる。「仮に大ブリテンの貨幣が突然に2倍になれば、貨金も間もなく2倍になるだろう。だが、食料や衣服やこの種の諸物品やの供給にそれに対応した変化が全く起きなければ、それらの価格は等しく騰貴するだろうし、労働者たちの状態は以前とまさに同一であるだろう。彼らは、彼らが貨幣量が増加する以前に携えていたのものの2倍の枚数のソヴリン貨とシリング貨を市場に携えていこうが、彼らはこれと引換えに、同一量の諸商品を獲得するに過ぎないだろう」(McCulloch 1854, 5. 強調は追加)。さらに Vint (1994, 82-3) も見よ。

(8) 「……彼は、救貧法は食糧の量を増加させないという自らの議論を『人口論』の最終版においてすら残したままにしておいたのであって、しかも、私的会話と手紙との双方においてリカードウがその誤りを指摘していたのに、そうだった」(Cannan 1917, 239)。だが、キャンナンが「マルサスの弟子たちは、食糧供給をそれに対する需要から何らかの仕方ですべて固定されていると見なすという、彼の奇妙な習慣を決して共有しなかった」(*ibid.*, p. 240) と述べるのは、少々不正確である。貨金基金は食糧でなければならないという観念的制約を免れても、マルサス流の貨幣支出に対する貨金財の非弾力的供給という論理は、種々の貨金基金説論者たちによって用いられ続けた。上注(7)を見よ。

(9)  
あなたは『人口論』の諸版中の]ある箇所、救貧税は分配されるべき食糧の量を増加させる上で全く効果をもたないかのように論じておられたと思います——あなたは救貧法がその需要を、従ってその供給を、増大させることをお認めになる義務があると思います。(1816年1月2日付マルサス宛, Ricardo 1951-73, VII, 2-3. [ ]内は追加)

マルサス以後も賃金基金説論者たちを支え続けた中立性命題は、後に見る『食糧高価論』の移転支出効果論とは厳密には区別されるべきだと私は考える。だが、この中立性命題は、救貧法と労働組合との批判装置としてそれを利用した『人口論』諸版を除けば、1811年の2つの貨幣論文でもその他でも強調されることはなかった。

## II. 3 強制貯蓄：ヒューム効果

次に、外生的貨幣供給の仮定に基づく数量説のもう1つの系論である「ヒューム効果」のマルサスにおける存在を確認しよう。マルサスは、このヒューム効果をただ単に受け入れたのみならず、彼の「強制貯蓄」論によって一層洗練させたのである。マルサスは、イングランド銀行現金支払制限期における経済の活況をこう説明した。

……仮に、一国の生産物の支配力を主として生産的諸階級の手中に投げ入れるような流通媒介物の分配が起こるとすれば——つまり、仮に、通貨のかなりの部分が怠惰な人々および固定所得で生活する人々から取り上げられて、農業者たちや製造業者たちや商人たちに移転されるとすれば——資本と収入との間の比率は資本に有利なように大きく変化させられるだろうし、間もなくその国の生産物は大いに増大するだろう。……新たな銀行券は、それだけの量の追加的資本として、事業の経営に必要なものを購買するために市場に入り込む。だが、一国の生産物が増加しないうちは、ある人が他人の分け前を減少させることなしには、それをもっと多く所有することは不可能である。この減少は、新たな銀行券の競争によって引き起こされる物価騰貴によって、ただ買うだけで売り手ではない人々から前と同じだけの年生産物を購買する力を奪うことを通じて生じる。その一方で、そのすべてが買うばかりでなく売りもする人々であるすべての勤労諸階級は物価の漸進的騰貴の間に並外れた利潤を得つつあり、この昂進が止むときですら、新たな発行以前に彼らが所有していたものと比べて一層大きな割合の年生産物の支配を委ねられるのである。(Malthus 1811a, 47-8/訳 (2) 93-4. 強調は追加)

(10)  
さらにマルサスは『国富論』のヒューム批判に触れ、ヒュームを擁護して、「不注意にも事実に関して全く研究しないままヒュームが書いた時代の高価格を凶作に帰し、それは紙幣の増加によって引き起こされたものではあり得ないとほのめかしている」(Malthus 1811a, 49/訳 (2) 96) とスミ

---

(9) 当時リカードウが見ていた『人口論』は第2版(1803)であった。だがりカードウは、マルサスが『人口論』第5版(1817)でも同じ論理を用いたのを見て、再び同じ批判を書き送った(Ricardo 1951-73, VII, 202. マルサス宛1817年10月21日)。また同じ手紙( *ibid.*, p. 203) でリカードウが、労働組合による貨幣賃金増は需要構造変化に基づく産出効果を経由して実質賃金増をもたらすと主張し、『人口論』第5版での賃金基金説による労働組合批判(James 1989, I, 375/訳 (III) 158)を批判している点にも注意せよ。

(11) スを反批判した。すなわちマルサスは、ヒュームの数量説を受け入れ、紙幣増加による物価騰貴が当時のスコットランドで現実にあつたと主張したのである。

こうしてマルサスはヒューム効果を積極的に受容して、洗練させた。なるほどマルサスは、イングランド銀行に一層厳しいスタンスをとった1811年第2論文では、「増加しつつある流通媒介物の好ましい影響についてのヒュームの全く正当な所見」については、それに伴う「大きな不正を別にしても、その原理それ自体がかなりの制限なしには安んじて受け入れることはできない」(Malthus 1811b, 74) と留保の態度を若干強めた。だが、この強制貯蓄のテーゼは、後の地代論争期の諸パンフレットでも力をこめて語られている事実は残る。

このような物価騰貴の中間期は、これに続いて逆行的な運動が起こらない時には、国富の増進に最も強力に貢献する。……それは、過去20年間にわが国で生じてきたに違いない、そしてこれほど長期にわたってわが国の資本の年々の巨額の破壊にもかかわらずわが国の資本を大いに増大させてきた、諸個人間で莫大な蓄積を説明できるように思われる唯一の原因である。(Malthus 1815a, 144-45/訳110-11)

われわれは物価騰貴が産業に及ぼす魔術的效果を知っている。これはヒュームによって指摘されてきたし、またこの種の問題に留意してきたすべての人に目撃されてきた。(Malthus 1815b, 166/訳145)

そして、この強制貯蓄論については、まさにそれがマルサス貨幣理論を特徴づけるものの1つであることがこれまで研究史上強調されてきた。例えば、

マルサスだけが、通貨膨張は、ソートンによって示唆された線に沿って取引の拡大を引き起こすばかりでなく、資本の増加をも引き起こすと述べた。(Morgan 1943, 54. 強調は追加)

ソートンがたぶん彼らのうちで最初にこれ〔強制貯蓄〕を明確にしたのだが、最も発展した古典派的分析はマルサスのうちに見出すことができる。(O'Brien 1975, 163. [ ] 内は追加)

だが、このマルサスの強制貯蓄論は、(それが現金支払制限期のイングランド銀行擁護に繋がる可能性を別にしても) リカードウの強い批判を招くことになった。すなわち、マルサスは、固定所得者たちは彼らの全所得を消費に回すと前提し、インフレーションは彼らの収入の一部を資本に転換す

---

(10) 「紙幣の増加は、全通貨の量を増大させ、その結果その価値を減少させて、必然的に商品の貨幣価格を高める、といわれてきた。だが、通貨の中から取り去られる金銀の量は、通貨に付け加えられる紙券の量と常に等しいのだから、紙幣は必ずしも全通貨の量を増大させるとは限らない。……1751年と、ヒューム氏がその著『政治経済論集』を公刊した1752年すなわちスコットランドで紙幣を大増発した直後とに、食料品価格のきわめて顕著な騰貴があつたが、これはおそらく天候が不順であつたためであつて、紙幣の増加のためではない」(WN II. ii. 96)。

(11) 1811年第1論文を公刊前に見ていたF. ホーナーは、マルサスの立場を支持した。「私は、スコットランドにおける物価騰貴に関してのヒュームとスミスとの間の違いについて、あなたは真の解決をお与えになつたと考えた気がいたします」(1811年1月4日付マルサス宛, Horner 1994, 664)。



ると主張する。だが、固定所得者たちは所得を消費と貯蓄とに配分しているのではないか？ インフレーションが仮に消費の実質価値を下落させて「強制貯蓄」を実現したとしても、それと同時に本来投資に回るべき貯蓄部分の実質価値も下落させるのではないか？ 「私には、なぜ通貨の減価が怠惰な人を減少させて社会の生産的階級を増加させるのか、その理由が全くわからない」<sup>(12)</sup> (Ricardo 1951-73, III, 121-23)。だがマルサスは、結局、このリカードウの批判に一度も正面から応答したようには見えない。

『経済学原理』(1820)以前のマルサスの強制貯蓄論の特徴はこうである。第1に、それは、後の『原理』で大きな主題となる過剰資本と供給過剰との創出には全く関心を払うことなく、数量説の素直な展開を見せている。強制貯蓄に対してマルサスがおいた制限は、それが不正な財産の移転という「不正義」(1811a, 48/訳(2) 95; 1811b, 74)を伴う点のみにあった。第2に、それは、物価上昇局面における産出増を認めるので、後の第III節で見るマルサスの物価・正貨流入メカニズムの主張と矛盾する。このメカニズムによると、貨幣供給増による国内物価水準騰貴は速やかに金流出を招くのである。ここには、一国における外生的貨幣供給を仮定する論者に共通する自己撞着がある。

## II. 4 物価先導論：『食糧高価論』(1800)

だがマルサスは、生涯にわたって首尾一貫して数量説を練り上げ発展させた訳ではなかった。そしてマルサスによる非数量説的論理の提示は、早くも1800年に彼が出版したパンフレット『食糧高価論』<sup>(13)</sup>のうちに見出されるのである。

---

(12) リカードウはそれゆえ、仮に物価上昇局面において強制貯蓄に似た現象が生ずるとすれば、それは、ほとんど貯蓄部分をもたず、その所得上昇が常に物価騰貴に時間的に遅れる労働階級の賃金の犠牲のもとに生ずると考えた (Ricardo 1951-73, III, 318-9; VI, 16, 233-4)。オーストリア学派による強制貯蓄論の「再発見」から今日に至るまでのこの問題に関わる諸局面の多くが、既にマルサス＝リカードウ論争に先駆けられていた点を含め、Hansson (1987)による手際のよい整理を見よ。

(13) このパンフレットの詳細な紹介に関しては、中西 (1997, 117-38)を見よ。このパンフレットの目的は、1800年当時における穀物価格の並外れた騰貴を、投機にも、独占にも、紙幣の過剰発行にも帰すことなく、救貧法に帰すことにあった (Johnson 1949, 59-60)。それを論証するためにマルサスは不可避免的に貨幣を視野に入れざるを得なかったのだが、既にマルサスは1799年の大陸旅行でスウェーデンにおける流通紙券と食糧価格との関係に注目していたように思われる。「現在の銀行券は依然としてそれらの額面価値を保持している。だが、戦争の出費を支払うために発行され、しっかりした担保がない流通紙券は、今では40パーセントの割引を受けている。それらは大蔵省から発行され、議会によって保証された。労働の価格はここ数年大いに騰貴してきたが、しかし食糧価格はほぼそれに比例しているの、労働者は以前と比べてそれほど暮らし向きがいい訳ではなく、これが人口の増加を妨げている」(James 1966, 72)。だから、「食糧価格は1799年に鋭く騰貴したが、しかし不作と輸入難とがきわめて明白な説明に思われたので、食糧の高価格についての1799年と1800年の多くのパンフレットのうちで、マルサスのものを含むごく少数のものだけが考えられる貨幣的原因に言及した」(Fetter 1965, 30)したとしても不思議ではない。

……分別があり事情に通じている多くの人々は、食糧の高価格を流通紙券量のせいにしてきた。イングランド銀行の正貨支払停止によって紙券発行がその自然的抑制をもつのをやめれば、流通界がこの通貨で過剰になるだろうという懸念には疑いなく十分な理由があった。だが、このようなことは、正貨と比較して銀行券に目立つほどの減価がなければ、相当程度で起こり得るはずがなかった。このような減価は起こらなかった……。従って、流通紙券量が去年の間大いに増加したとしても、私はそれを、食糧の高価格の原因であるというよりはむしろ結果だと見なしたい気がする。(Malthus 1800, 15-6)

貨幣供給増は物価の原因ではなくて結果だとするこの論理は、すぐさま『人口論』第2版に組み込まれ、最終版まで残された (James 1989, I, 350-55/訳 (III) 114-22)<sup>(14)</sup>。またマルサスは、このパンフレットにおいて、「本来インフレーションは貨幣的現象である訳ではないことを明確に理解した」(Johnson 1949, 60) と解釈されてもきた。<sup>(15)</sup> だが、マルサスのこのパンフレットの——それゆえ第2版以降の『人口論』の——議論はそれほど明確ではない。

マルサスはまず、社会の総貨幣所得一定のもとで、救貧税を經由して被救済貧民に教区手当として所得が移転され、それが食糧購入に支出されるケースを想定する。食糧は相変わらず貨幣支出に対して非弾力的な供給にある。<sup>(16)</sup> さて、食糧が全人口を養うのに絶対的に不足しているにもかかわらず、貧民の救済が絶対必要だと見なされるなら、富者から貧民への所得移転は累進し、食糧価格騰貴が昂進するだろう。こうして、

社会の中間階級はごく速やかに貧民と混ぜ合わせられるだろうし、どんなに大きな財産をもつ人々でも、一方では食糧の異常な価格の重圧の高まりに、他方ではそれ以外には扶養手段をもたない人々に対する手当のためのさらに異常な課税額に、抵抗することができないだろう。……すべての財産のきわめて完全な平等化が生じるだろう。全員が同一量の貨幣をもつだろう。わが国のすべての食糧は消費されるだろうが、人民全体が一緒に飢えるだろう。(Malthus 1800, 13. 強調は追加)

明らかにマルサスは、きわめて非弾力的な食糧供給を仮定した上で、社会の総貨幣所得一定のもとでの救貧法による政府移転支出の価格効果を述べているのである。<sup>(17)</sup>

---

(14) 「……1800年と1801年における地方銀行券の大増発はそもそも、明らかに食糧の高価格の原因というよりはむしろ、その結果であった」(James 1989, I, 354/訳 (III) 120-21)。

(15) このマルサスの主張は、直ちに主要な地金主義者の1人キング卿に注目された。キング卿は、「経済学という科学に貴重な追加を行なった最近の著作『人口の原理』において、1800年の不足の間の食糧価格の騰貴は当然に流通媒介物の増加とイングランド銀行券発行の増加とを必要としただろう、とマルサス氏によって正当に述べられた」とし、マルサスの議論を一部受け入れたように思われる (King 1804, 39n.)。

(16) 私は、このパンフレットに対して、「マルサスは供給量の固定という仮定をはずしている」としたり、「生産上のある失敗」により供給量が固定されたどのような財貨にも適用可能な形式的一般性を、『食料高価論』のモデルは獲得しているのである」としたりする解釈 (中西 1997, 121, 125) には同意できない。

だが、このマルサスの論理は、たとえ彼の暗黙の諸仮定を認めても、食糧以外のすべての商品を含む一般物価水準が騰貴することを保証しないだろう。なぜなら、マルサスの論理に従えば、救貧法の究極の結果は「全員が同一量の貨幣をもつ」ことにあるのだから、富者による食糧以外の諸財への支出は必然的に減少しなくてはならないからである。だがマルサスは、まず物価が高騰し、その結果銀行券が「大增発された」ことを、つまり貨幣供給が増大したことを認めた。

だが、注意されねばならない1つの事情がある。同一量、あるいはほぼ同一量 [ここに次の原注がある：「食糧不足のときは、諸商品の流通量はおそらく豊年ほど多くはない」] の諸商品を国中に流通させるためには、それらがずっと高価である場合には、それがどんなものであろうと一層多量の媒介物が必要となるに違いない。流通界は当然に一層多くのものを吸収する。(Malthus 1800, 16. 強調と [ ] 内は追加)

社会の総貨幣所得一定の仮定をはずせるような「紙券の大增発」による貨幣供給増は、いったいどの経路からもたらされたのであろうか？ マルサス自身が提示した可能性は、銀行貸出の増大による「過大取引」=投機であった。

彼ら [地方諸銀行] は、自らの銀行券が今では食糧不足以前と比べて一層長く、一層多量に外にとまることがわかってきたので、このことが多くの人々を自分の資本以上に過大取引するように誘っているのかもしれない。(Malthus 1800, 16. [ ] 内は追加)

だがこれは、自らの救貧法批判の論理を損なう譲歩であるといわなくてはならない。<sup>(18)</sup>

しかしながら、このような『食糧高価論』と第2版以降の『人口論』における「物価が貨幣に先行する」という記述は、決して例外的な筆のすべりとして片付けられてはならない。それは確かに、『経済学原理』においてすら再び語られるのである。

わが国の紙券処理の歴史において、通貨の多寡は物価の騰落を伴いまたこれを激化させたが、しかしこれを主導したことはほとんど、あるいは一度もなかったことが見出されるだろう。そして、戦争の終りに通貨の収縮が始まる前に物価が下落したことを想起することが最も重要である。それどころか、物価の下落こそが、地方諸銀行を破産させ、わが国の過剰な紙券通貨が立脚していた脆弱な基礎を示したのであった。この突然の収縮は、疑いもなく、商人と国の困窮を著しく激化させた。(Pullen 1989, I, 514. 強調は追加)

そしてこの文脈で重要なテキストは、マルサスのトゥック書評論文 (Malthus 1823b) である。こ

---

(17) 「……彼 [マルサス] のモデルは均衡予算を伴うインフレーションの純粋なケースである……」 (Johnson 1949, 60. [ ] 内は追加)。

(18) マカロックは、貸金基金説における貨幣の中立性命題の適用ではマルサスに従ったのに、『食糧高価論』が主張する単なる移転支出による需要増では「そのような食糧不足が物価に及ぼす影響を特定するのは不可能だろう」とマルサスを批判した (McCulloch 1845, 78)。

の論文でマルサスは、トゥックを利用しつつ、対仏・ナポレオン戦争下での穀物の需要と比べた供給不足が穀物需要を大いに高め、それが穀物価格を騰貴させて、ひいては一般物価水準を騰貴させた論ずる。そしてマルサスによれば、この過程は貨幣供給の変化とは無関係に生じたのであって、信用（貨幣の流通速度）が諸商品の需給関係に無限に弾力的に順応することで、貨幣供給には変化がなくても一般物価水準が騰落したのである。

……われわれは…… [トゥックが] 若干の重要な物品の平均的消費と比べた供給不足は物価騰貴を伴う一般的需要増を生み出すことを明確に述べているばかりか、イングランド銀行券も貨幣もどちらも増加しない場合ですら、このような物価騰貴が生じるかもしれない仕方を明確に指摘していると考える。(Malthus 1823b, 237. 強調および [ ] 内は追加)

さらにマルサスは、生産物の一部の破壊はその需要を一層高め、その価格騰貴をもたらすことでかえって勤労を増大させるという、初期の強制貯蓄論よりさらに受け入れ難い議論を展開する。

天候によってであれ、輸入障害によってであれ、不生産的消費の割合の増加によってであれ、一定の範囲内で一国の生産の一部が減少したときにはいつでも、新しい勤労を活動させる力は無傷なままであるばかりか、量が価格に及ぼす影響の普遍的法則によってそれは大いに増大する。…… [穀物が不作のときは] 労働の維持に充てられる特定の基金は、その量においては減少するとはいえ、この幸福な自然の備えによって、被ってきた損失を回復させて翌年の生産物を増加させるその効率性を高めるのである。労働者たちは、疑いなく多少の窮乏を被るとはいえ、雇用の大きな全般的増加によってかなりの程度で報われる。トゥック氏の言葉によれば、生産諸階級にどっと生じる繁栄がある……。 (Malthus 1823b, 242-43. [ ] 内は追加)

ここには、「とうてい健全でない」(Bonar 1924, 291) 貨幣理論があるだけではない。マルサスはこの論文で、諸商品間の各々の需給条件に基づく相対価格の問題を絶対価格の問題と混同することで、貨幣理論自体を事実上無用とするところまで自らの需給分析を押し進めてしまったように思われる。

だからマルサスは、別個の2つの系列の貨幣理論をその生涯にわたって並存させたままにしたのである。1811年の貨幣論文から地代論争期の諸パンフレットにかけては、貨幣供給増が弾力的供給を生むために貨幣が物価を先導することが必要だった。他方、救貧法批判では、総貨幣所得一定のもとでの移転支出が非弾力的な供給に直面して食糧価格を騰貴させることがどうしても必要だった。さもなければ、マルサスは救貧法を批判できなかったからである。そしてこの過程で、マルサスは、特有の商品需給分析を進展させつつ「物価が貨幣に先導する」という思想を進展させていった。だがこの論理は、『食糧高価論』においてすら首尾一貫して展開されていなかったし、さらにトゥック書評論文においては貨幣理論は商品需給論に埋没してしまったのである。私は、マルサスがこれら2つの系列の論理をどこでも整合させようとせず、それらを見ず知らず並存させたことこそが、彼が体系的な貨幣理論を構築し損なった主因の1つであったと信ずる。

### III. 地金論争の主題

#### III. 1 地方銀行の責任

地金論争においては、古典派は当時のインフレーションの責任をもっぱらイングランド銀行に帰したのに、「ジョン・ウィートリー<sup>(19)</sup>……だけが、スミスにはなくヒュームに従って」地方銀行に何らかの責任を帰したという主張がある (Glasner 1989, 211)。しかしこの点に関しては、マルサスもまたインフレーションの責任の一斑を地方銀行に帰したことは注目に値する。

ソートン以来の古典派は、地方銀行の総発券量は結局はイングランド銀行の発券量によって規制されるとした。なぜなら、ロンドンと地方との間に裁定取引が成立する限り、例えば地方で値が高い財があればロンドンの一層安価な財を購入するために、(地方銀行券ではロンドンの財は購入できないので) イングランド銀行券かロンドン宛の手形かのどちらかを求めて、地方銀行への地方銀行券の復帰が生じるだろうからである。

従って、その需要が絶えず同一だとわれわれが認めているただ一種のロンドンの紙券の供給を制限することは、こうしてロンドンの紙券の価値を維持するとともに、わが国のすべての紙券の量を制限するばかりか、その価値を維持するのにも役立つ手段なのである。(Thornton 1939, 211/訳 226)

確かにグラスナーが主張するとおり、地金論争においてはこのソートンの主張は一般に認められ、もっぱら地方銀行に過剰発行の責任が帰されることはまずなかった。マルサスも実は、1811年論文ではこのソートンの命題を支持して次のように述べている (そしてそれは、彼が描いた物価・正貨流出入メカニズムとも整合しない訳ではない)。

われわれは、地方銀行券が以前とほぼ同じ地域を占め続け、そのどれもが本質的に他の銀行券にとって代わることがないとすれば、イングランド銀行券発行の増加には地方銀行券発行の比例的増加が伴うということを、完全に論証可能な論点と見なす。(Malthus 1811b, 68)

だがその一方で、マルサスにはそれと矛盾する命題、すなわち地方銀行がイングランド銀行とは独立に通貨供給増をもたらし得るという命題が並存していた。それは早くも、先に第II節で触れた1800年の『食糧高価論』の文章中に現れていた。

だが、注意されねばならない1つの事情がある。同一量、あるいはほぼ同一量の諸商品を国中に流通させるためには、それらがずっと高価格である場合には、それがどんなものであろうと一層多量の媒介物が必要となるに違いない。流通界は当然に一層多くのものを吸収する。従って、おそらくイングランド銀行はこのためにもっと多くの枚数の同行銀行券を発行することが必要だと思ったのだ。ある

---

(19) ウィートリー (Wheatley 1807, 330-57) は、発券集中・小額銀行券禁止・情報公開の3つの柱を立てて銀行改革を提言したが、その改革の必要の根拠の1つとして、小額銀行券発行をめぐる地方諸銀行間の競争と倒産とによる金融システム不安を挙げた。

いは、もし同行がそうしてこなかったとすれば、この不足分は地方銀行家たちによって補充されてきたのであって、彼らは、自らの銀行券が今では食糧不足以前と比べて一層長く、一層多量に外にとどまることがわかってきたので、このことが多くの人々を自分の資本以上に過大取引するように誘っているのかもしれない。(Malthus 1800, 16. 強調は追加)

そしてそれとほぼ同じ文章がすぐさま『人口論』第2版に組み入れられ、しかもそこでは明確にソーントン批判が展開されていたのである。

従って、流通媒介物増加を求める需要は、地方諸銀行の供給に委ねられることになったが、地方諸銀行がこれほど有利な機会の利用をためらったとは考えられない。…従って、1800年と1801年における地方銀行券の大増発はそもそも、明らかに食糧の高価格の原因というよりはむしろ、その結果であった。しかし、それがひとたび流通界に吸収されれば、必然的にすべての商品価格に影響を及ぼし、以前の低価格への復帰のきわめて大きな障害となるに違いない。(James 1989, I, 353-54/訳 (III) 119-21. 強調は追加)

そしてマルサスは上の引用文の末尾に次の注を付したのだ。

ソーントン氏は、紙券信用に関するその名著の中で、地方諸銀行の巨額の紙券発行が、諸商品の価格を騰貴させたり諸外国との不利な為替の状態を生み出したりする上での影響に十分に注意してこなかったように私には思われる。(James 1989, I, 354 n. 11/訳 (III) 121. 強調は追加)

この注は『人口論』第3版(1806)以後削除されたとはいえ、本文自体は『人口論』の最終版に至るまでほぼ同じままであった。

このような地方銀行の責任に関するマルサスの命題は、明らかに彼の救貧法批判から出来た「物価先導論」の1系論として成立した。だがこれは、マルサスが展開した物価・正貨流出入メカニズムの議論と矛盾するし、彼の物価調整論は首尾一貫性に欠けていたのではないかという疑念を抱かせるものである。

### III. 2 トランスファー問題

マルサス貨幣理論の評価をこれまで決定づけてきたヴァイナーの立場を、ここで簡単に振り返る必要があるだろう。

ラフリンが主導したシカゴ学派に対抗するために、F.W. タウシッグおよび彼の著名な学生団(ヴァイナーを含むハーヴァード学派)が目指したのは、古典派的というかヒューム的な物価・正貨流出入メカニズムに基づく国際調整論の復興であった(佐藤 2002)。だが、それまで古典派国際調整論を代表すると目されてきたリカードは、ヴァイナーによれば、古典派的ではなかった。なぜならリカードは、各国の物価水準格差に基づく金移動による国際調整を、少しも説いていないからである。それどころか、リカードの主張の核心は、国際調整では金は最小限しか移動しないという点にこそあった。「だが」、とヴァイナーは述べる。

ソートンとマルサスによれば、物価水準の初期的関係を維持するのに十分な債務国からの金輸出に加えて、債務国における物価を下落させて、それゆえ輸出を刺激するだろうような追加的な金輸出がなければならない。(Viner 1924, 195-96)

このヴァイナーの主張は、自らの国際調整論に若干の譲歩を認めた (Viner 1937, 306-7) 1937年の著作においても基本的に変わらなかった。すなわち、

……ヒュームは、他の諸国と比較した一国の貨幣量の相対的变化は、物価の相対的变化が貿易の進路と正貨流出入とに及ぼす影響の結果として、「貨幣の水準」が再び国際的に均等化されるまで、外国生産物の価格と比較してその国の生産物の価格騰貴をもたらすだろうと主張した。これは、次世紀の間中、ほとんど普遍的に受容された学説だった。ウィートリーとリカードウは異議を唱えたけれども、ソートンとマルサスは、支払差額の均衡が穀物の不作や援助金の送金やによって攪乱された場合には相対価格の似たような変化が生じるだろうし、それは均衡を回復するように作用するだろうと主張したのであり、これもまた「リカードウ理論」という誤った名称のもとに広範に受容されるようになった。(Viner 1937, 319-20. 強調は追加)

こうして (ソートンとともに) マルサスが、古典派調整メカニズムをヒュームにならって明確化した雄として「再発見」されたのである。

ヴァイナーによる「再発見」以来、マルサスの金移動論が、①通貨の状態とは全く無関係な金流出入、②通貨の状態に基づく金流出入、の二元構造<sup>(20)</sup>からなりつつも、「ここには相対的価格水準の変動に着目したヒューム以来の古典的な自動調整機構の理論が表明されている」(山下 1965, 153) 点は周知だろう (だがマルサスが、①のように、通貨の状態に関わらない正貨流出を主張するのは、正貨流出の事実だけでは直ちにイングランド銀行の政策を批判できる訳ではないということ、つまり反地金主義者への一定の譲歩を、マルサスが認めざるを得ないことを意味する)。そしてマルサスがリカードウを批判したのは、まさに上の①をリカードウが等閑に付したからであった。

リカードウ氏の業績の大きな欠点は、為替相場に作用する諸原因に対して偏った見方をしていることである。……為替相場が影響を受ける原因には2つのものがあり、しかもそれらは、結果においてはよく似ているとはいえ起源においては完全に別個のものである。第1の最もありふれたものは、通商によって相互に関係し合う諸国民の欲求や必要の変化から生じるさまざまな種類の生産物に対する需要の変化である。第2は、それがどのような仕方でも引き起こされようと、通貨の比較的な過剰もしくは不足である。……だがリカードウ氏は彼の注意を、これらの原因の双方に向けるどころか、そのうちの1つだけに限定している。彼は、為替の有利不利を、もっぱら通貨の過剰あるいは不足のせいにし、輸出を上回る輸入あるいは輸入を上回る輸出の一時的超過の本来の原因としてのさまざまな社会

---

(20) ソートンとマルサスは、ともに通貨の状態以外の「不利な支払差額」に基づく正貨流出を唱えたが、しかし両者間には若干のニュアンスの違いがあった。ソートンは、不利な支払差額があるとしても、それはマネタリーな措置によって矯正できない訳ではないとする (それは政策的判断に委ねられる)。だがマルサスは、マネタリーな措置とは全く次元の異なるところで絶対的に正貨流出を必要とする場面があるとする。このようなマルサスの理論は「二元論的立場」と形容されることがあった (山下 1965, 156)。

の欲求や必要の変化を見過ごしている。(Malthus 1811a, 24-5/訳 (1) 80-2. 強調は原文)

マルサスの念頭にあったのは、ナポレオン戦争下での凶作による並外れた穀物輸入や、巨額の同盟諸国への軍事援助金などをファイナンスするという当時のブリテンがおかれていた状況だった。

……穀物の並外れた輸入をしようとする一国民の欲求あるいは……外国政府に多額の援助金を送金しようとする一国民の欲求と、通貨の過剰または不足という問題との間には、どのような必然的關係が存在するのだろうか？(Malthus 1811a, 26/訳 (1) 83)

なるほど、マルサス自身、ある国がこのようなトランスファーを実行しようとする際には、最も安価な手段によるのが経済合理的であることは認める。その時点で最も安価な手段が貨幣であるかそれ以外の財であるかは、もちろん時と場合による。

だがマルサスによれば、トランスファーを実行しようという決意は、まず、ブリテンの市場における外国通貨建て為替手形への需要増となって現れる。これはブリテンの為替相場を下落させることで外国市場でのブリテンの財の価格下落をもたらし、「輸出ドライブ」(中村 1975, 20)を生む。だがこのような金以外の商品への需要増では、外国通貨に対する超過需要を埋め合わせるには絶対<sup>(21)</sup>に不十分であり、為替相場は結局、金現送が有利になる点まで下落するのである。

なるほど、リカードウ氏が述べたように、いかなる国民といえども、貴金属をもってするよりも商品をもってした方が彼らの債務を割安に弁済し得るならば、貴金属をもって彼らの債務を支払わないだろうということは疑いない。だが、諸商品の価格は市場における供給過剰から著しく下落しがちであるのに対して、貴金属は、社会の普遍的同意によって一般的交換媒介物……とされてきたものであるから、……どんなに大きな額でもその名目評価で支払うだろう。(Malthus 1811a, 27/訳 (1) 83)

こうして金はいずれにせよ輸出される。この時点で、既に支払国と受取国との初期的な相対的物価水準は攪乱され、支払国では物価水準の下落、受取国では上昇が生じ、この物価水準の開きを除去する物価・正貨流出入メカニズムが働き始め、初期的な相対的物価水準均衡に復帰するために再び支払国に金が復帰してくる……という訳である。

……貴金属をごく少量でも輸出すれば、それは輸出国の通貨を増価させ、輸入国の通貨を下落させるという結果を直ちに生むのであるから、このことを通じて、当然に各国間の均衡水準が成立するのである。だが、この水準が全体として維持されている間においても、これらの国の欲求が変動すれば、それはしばしば不利もしくは有利な支払差額を生じ、しかもその額は、為替によって容易に安定することができないほどになるということ、また通商によって相互に交通している各国民には、為替を安定させる……ために使用されるべき一定量の貴金属が存在したし、また常に存在するだろうこと、こ

(21) 私は、この点をめぐって、マルサスにおける「世界貨幣」認識(山下 1965, 156; 中村 1975, 20)の存在に拘泥すべきではないと思う。マルサスの国際調整論は、明らかに数量説的な物価・正貨流出入メカニズムに中心があり、その限りでは金は国際調整において主役を演ずるに過ぎないからである。



のことは疑い得ない。(Malthus 1811a, 27-8/訳 (1) 84. 強調は追加)

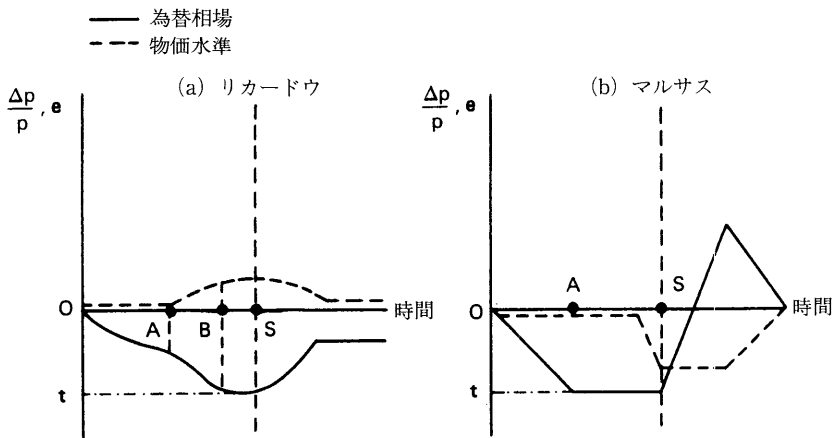
従って、マルサスの国際調整論においては、各国の物価水準の初期的均衡を攪乱するために、そして再び回復させるために、年々膨大な量の金が移動しつつあるということになる。<sup>(22)</sup>

だが、リカードウはこれを否定した。そして次のようにマルサスの国際調整論を皮肉をこめて批判した。

わが国では貨幣を高価に、他国では安価にするという目的だけのために貨幣が海外に送られ、またこのような手段によってそれがわが国に復帰するのを保証するなどということが考えられるだろうか？ (Ricardo 1951-73, III, 103)

「ここでリカードウは、物価・正貨流出入メカニズムを否定しているのである」(Gomes 1993, 85)。このゴウメズの示唆を明確にするために、マルクッツォ＝ロッセリによるリカードウとマルサスのトランスファー・メカニズムの解説(図1)を見てみよう。縦軸には、物価水準の変動( $\Delta p/p$ )と平価 $e$ に関する市場為替相場とがとられている。tは金輸出点を示す。リカードウのケースでは、OAは変化していない価格でのブリテンの財輸出の支払に対して与えられる為替手形を通じて支払われる債務の部分を示す。ABでは物価が上昇し、為替相場は一層下落するものの、輸出は増加し続ける。最後にBSは債務のうち金の現送を通じて支払われる部分を示す。債務が支払われた後は、為替相場と物価とは部分的にそれらの初期水準を回復する。マルサスのケースでは、債務のほ

図1 リカードウとマルサスとにおける国際調整



(出典: Marcuzzo and Rosselli 1991, 146)

(22) ラフリンは、このような物価・正貨流出入メカニズムを嘲笑する。「……物価はある国に対する金の輸出入によって騰落するし、あるいははしてきたということを示す、いかなる統計的証拠も挙げることはできない。……そしてまた、金移動は、古典派理論において述べられてきたような原則には全く支配されていない」(Laughlin 1903, 372)。

とんどもは金現送を通じて支払われる (AS)。金が流出するにつれ、ブリテンの物価は下落し、ブリテンの輸出は再び増大するが、その一方で外国宛に振り出された手形の需要は急落する。為替相場が金輸入点に達するとともに物価は再び上昇し、為替相場は初期水準へと戻る (Marcuzzo and Rosselli 1991, 145-47)。彼女たちによる再構成は、マルサスのものばかりでなく、リカードウのトランスファー・メカニズムをもかなり正しく記述しているように思われる。リカードウは述べる。

仮に「われわれが、為替に関係している諸原因によって、地金がときおり一国から他国に移動することを認めている」としても、為替が地金の輸出を利益あるものにするような限界に下落するまで、地金がそのように移動するであろうことを、われわれは認めない。そして、仮に為替がそこまで下落するならば、それは通貨の安価と過剰との結果である……というのが私の見解である。…… [マルサスは] 貴金属の節約の原理が諸国民間に拡大されている範囲について、十分知っているとは私には思えない。(Ricardo 1951-73, III, 111-12. [ ] 内は追加)

しばしば通俗的な貨幣理論史では、リカードウはきわめて厳格な数量説をとり、その国際調整への適用では、各国の物価水準とその変動とに基づく物価・正貨流出入メカニズムを展開したと、実に奇妙に説かれることがある。このようなリカードウ像の通俗化はまた、マルサスの貨幣理論の真の理解を妨げることにもなってきた。以下のマルクッツォ = ロッセッリの主張は、ヴァイナー自身の調整論が今日おかれている状況 (佐藤 2002) と共鳴しながら、通俗的な貨幣理論史の重大な修正を迫っているといわざるを得ない。

従って、まさにリカードウが批判しようとした金流出入に基づく調整メカニズムが、リカードウに責任があったというのは奇妙である。リカードウの議論を曲解することによって、ヴァイナーは、リカードウの理論によれば援助金の支払とか穀物輸入の支払とかはブリテンからのいかなる金流出もなしに、また相対的物価の変化も為替相場の変化もなしに生ずると主張した。この見解を説明するために、ヴァイナーは、リカードウは長期のみを取扱っていたと述べる。すなわち、彼もまた調整メカニズムを金流出入と諸々の一般物価水準の相対的な動きとに基づかせていたはずだが、彼は最終的結果のみに関心があったので、その中間的諸段階 [金移動をもたらすはずの物価や為替相場の動き] を考慮に入れなかったという訳だ。(Marcuzzo and Rosselli 1991, 147. 強調および [ ] 内は追加)

要約しよう。「穏健な」地金主義者マルサスは、国際調整論では金の頻繁な移動による厳格なヒューム流の物価・正貨流出入メカニズムを提示しつつ、リカードウの国際調整論に反対していた。だが、このマルサスの調整メカニズムは、先に第II節で見たマルサスの強制貯蓄論とも「物価が貨幣量を決定する」という物価先導論とも明らかに矛盾するのである。

## IV. 地金の価値と主題の変化

### IV. 1 リカードウ地金案の受容とその変容

私が別稿（佐藤 1999, 8, 17-9）で論じたように、マルサスは生涯を通じてリカードウの「地金支払案」に公式に幾度か称賛を与えていた。だが第III節で見たように、マルサスは頻繁な金移動を前提とした国際調整を考えていたので、一国が保有すべき金量を最小限にまで節約しようというリカードウの地金案には不安を感じたことも事実である。

……私は、諸銀行にきわめて異常なほどの〔金の〕蓄蔵があるのでなければ、紙券通貨がもっともすみずみにまでゆきわたっているような国々において（突然の需要からの）金属価値の変動が常に最大であるのが見出されるのは、疑いなく感じています。（1815年10月15日付リカードウ宛, Ricardo 1951-73, VI, 299. [ ] 内は追加）

だから、「貨幣と銀行業とに関するマルサスの際立った特徴は、その徹底的な『保守主義』である。リカードウと同様に、彼は金本位制の強固な擁護者であった——彼が流通から金貨を排除するだろうリカードウの再開計画案に反対した点で、一層そうだった」（Hollander: 1997, 676）という評価も出来た。だが、このホルンダーの評価は二重に誤解を招く。なぜなら、第1に、マルサスはリカードウの地金案には生涯を通じて称賛を与えていたからであり、第2に、その上でマルサスはリカードウ地金案を徹底的に数量説に合致した需給論に読み直したのだからである。以下のマルサスの『経済学原理』におけるリカードウ地金案についての論評は、全文引用されるに値する。

だが、生産費が諸商品の価格に影響を与えるのは、それがそれらの供給を規制するからに過ぎないことを示すものと十分に見なせるような、最も顕著な事例が絶えずわれわれの眼前にある。それは、イングランド銀行券の量を制限することによってこの銀行券に人為的価値が与えられるという事例である。この目的のためのリカードウ氏の称賛すべき能率的な計画案〔地金案〕は、銀行券の供給を制限して仮に通貨が金属であったなら流通したはずの金の量を超過しないようにすることができれば、銀行券は常に金と同じ価値に保たれるだろうという、正しい原理に基づいて進められている。そして私は、仮にこの制限が紙券が金と交換されることなく完全に実行され得るとすれば、銀行券の価値は変化しないだろうことを彼は認めるだろうと、確信している。だが、たとえ金の最も重要な機能の1つを果たしているとはいえ、その製造には比較的何も費用を要さない一物品を、金と同じ量で供給することによって金の価値に保つことができるとすれば、それこそ、金の生産費が金の供給に影響を与える限りでしか金自体の価値はその生産費に左右されないことの、また、仮に生産費がなくなるとしても、金の供給が増加しなければ、わが国の金の価値は依然として同じままであるだろうということの、考えられる限りで最も明らかな証拠である。（Pullen 1989, I, 77-8. 強調および [ ] 内は追加）

これは明らかにリカードウ地金案の誤解であって、リカードウは需給原理の一応用として地金案を構想したのではなかった。この所見にリカードウは次のように応答した。

私はマルサス氏のこのパラグラフにおける所見に全く同意するが、しかし彼は、全く価値のない紙幣の発行者がもつ特有の特権を忘れている。仮にすべての人が任意の量の紙幣を発行することができ、しかも償還の義務がないとすれば、紙幣はその生産費を越える価値をどれだけの間もつだろうか。マルサス氏は問題を誤解している——私は、商品の価値は追加的供給がなければ常にその自然価格に一致するだろうと知っているのではなくて、生産費がその供給を規定し、従って価格を規定するといっているのだ。(Ricardo 1951-73, II, 48-9. 強調は追加<sup>(23)</sup>)

#### IV. 2 「商業世界の貨幣」と地金の価値

マルサスは、スミス (WN IV. i. 28) にならって地金を「商業世界の通貨」(Malthus 1811a, 27/訳 (1) 83) と呼び、生涯にわたって地金の価値の変動に強い関心を抱き続けた。地金に関する初期のマルサスの書簡は、ナポレオン戦争によるヨーロッパ大陸の混乱が大陸での貴金属の使用を増大させて、大陸における貴金属の価値を高めたと主張する。だが、イングランド銀行の現金支払停止はブリテンの通貨と大陸の通貨との間に価値の開きを生み出した。

仮にわが国の流通がその自然な状態にあったとすれば、つまり、仮に紙券がイングランド銀行で金と交換可能であり続けたとすれば、ギニ貨と地金のかかなりの輸出が生じたはずですし、これによって間もなくわが国の通貨の価値は大陸の価値と同じ水準にまで上昇したはずです……。こういった事情のもとでは、わが国の通貨の価値は大陸の諸通貨と比べて一層低いままであるに違いないでしょうし、為替相場はわが国にいつも大きく不利であるに違いないでしょうし、貴金属の輸出には永続的なプレミアムがつき続けるでしょう。(1810年2月5日ホーナー宛, Malthus 1997, 108-9)

だがマルサスは、たとえ現金支払再開によって金の増価が生じ物価下落がもたらされても、ブリテンが国際的に共通の本位をもつことは望ましいと主張した。<sup>(24)</sup>

(23) 中村廣治氏は、リカードウの地金案では兌換性は「間接的・媒介的な条件に転化して」おり、「通貨価値安定の直接の条件では」なく、「発行者の発行権能の『濫用』を妨げる『保障』」でしかないと主張される(中村 1999, 68)。仮に、リカードウが「本位の価値」に紙券の価値を合致させることを第一義と見なさず、紙券の価値の安定性のみを考えていたとすれば、中村氏の主張は首肯できるし、マルサスとリカードウとの相違も「『濫用』を妨げる『保障』」としての兌換性の有無だけだということになるだろう。だが、確かにリカードウはそうは考えていなかった。リカードウは、たとえ本位の価値が変動しても、われわれは紙券の価値の安定性を犠牲にしてすら紙券を本位の価値に一致させねばならないと説いたのだ。これこそが、われわれがある本位制を選択した結果なのであり、彼の地金案は、ただ通貨価値の安定を需給による数量調整で実現しさえすればよいという案ではなかった。「紙幣の発行者たちは発行をもつばら地金の価格によって調整すべきであって、決して流通紙券量によって調整すべきではない」(Ricardo 1951-73, IV, 64. 強調は追加)。マルサスの議論は、まさにリカードウが紙券量を数量調整によってではなく「もつばら地金の価格によって調整すべきで」と主張した意義を、捨て去るものである。

(24) マルサスは「たとえそれが物価の下落を意味しても国際的に共通の本位をもつことは望ましいと述べたが、しかしその理由を全く与えなかった」(Viner 1937, 215 n.24)。マルサスはこの時期の間中、金の価値は上昇しつつあると考えていた。1811年10月20日付リカードウ宛書簡 (Ricardo 1951-73, VI, 62) を見よ。

同一の測定尺度をもつ諸国民ができるだけ多いことがきわめて望ましいと常に考えられてきた。不幸なことに、長さや容積や面積やの尺度が異なる諸国で同じであることはほとんどない。だが幸いにも、社会の通商関係においては一層重要なことであるが、あらゆる文明諸国民は彼らの価値の尺度として貴金属を選ぶことに同意してきた。それにもかかわらず、きわめてありそうにないのにそうだと想定されている現今のこれらの金属の価値の変化〔金価値の上昇〕のために、われわれは、他の諸国民と共通の価値尺度をもつというこれまでわれわれが享受してきた有利さからわれわれ自身を排除すると同時に、わが国の流通媒介物における金の使用をすべて、そして銀の使用をほとんどすべて、われわれから奪い取ろうと目論んでいる訳である。(Malthus 1811b, 62. 強調は原文, [ ] 内は追加)

しかしマルサスの地金の増価への懸念は間もなく反転し、1814-15年の地代三部作までには<sup>(25)</sup>地金の価値は下落しつつあると見なされるようになった。だが、ここでは1820年の『原理』の叙述を確認しよう。すなわちマルサスは、「ヨーロッパ中の貴金属の価値にほとんど例外なく生じた徐々の下落、最も富裕な諸国に生じてきたさらに大きな下落」(Pullen 1989, I, 199)に触れて、貨幣価値の下落から生じる好ましい影響を描いた。

……穀物の価格騰貴とともに始まる貴金属の価値の低下は、それが続く限り、新しい土地の耕作と増加した地代の形成とを促進する強い傾向がある……。 (Pullen 1989, I, 170; cf. *ibid.*, pp. 202-3)

だが、1823年の『価値尺度論』後には再び異なる地金価値の趨勢が語られた。

……どの〔尺度〕方法に従っても、地金の価値は平均して1792年から1813年にかけてかなり下落したに違いないし、同じ基準によれば、地金の価値は1813年以来かなり上昇したに違いないことが明らかになるだろう。(Malthus 1823b, 250. [ ] 内は追加)

それゆえ、今や経済は、永続的な物価下落に耐えなくてはならないのである。

このようなマルサスの地金の価値の趨勢に対する見方の変化は、一部は彼が採用した「価値尺度」の変遷に起因した。<sup>(26)</sup>だから、彼の尺度のたび重なる変遷自体が、種々の尺度の適用によるその都度別個の地金の価値評価とその帰結とについての彼の主張の実践的重みを、いささか疑問視させる一因となるだろう。<sup>(27)</sup>さらに、リカードウが指摘したように、

---

(25) Malthus (1815a, 144/訳 111) を見よ。マルサスはこの時期、穀物価格と賃金とで測ると富裕な国では必然的に貴金属の価値は下落すると主張し、ヒューム的な国際間の「貨幣の水準」の均等を否定した (*ibid.*, p. 138 n.15/訳 100)。だがこれは、彼自身の国際調整論と矛盾する。Viner (1937, 314) も見よ。

(26) マルサスは自らの価値尺度を、『原理』(1820)における「穀物と労働との中項」から、『価値尺度論』(1823)以後「支配労働」に変えた。Hollander (1997, 714-35) も見よ。

(27) リカードウはマルサスの『価値尺度論』への評注の中で、皮肉をこめて、「あなたはいつも、戦中の大部分の間は地金の価値は下落したと考えたのではなかったか？」(Ricardo 1992, 48 note XV) と指摘した。

ところで、常に、地金問題についての議論において、マルサス氏は中道をとり、紙券の価値の外見上の低下を、半ば紙券の価値の実質的低下に、半ば紙券が比較される媒介物（地金）の価値の実質的上昇に帰している、と私はいつも理解している。彼は言った、商人たちは半ば正しい、なぜなら地金と紙券の違いは半ばは地金の騰貴によるのであるから——地金論者も半ば正しい、なぜならこの違いは紙券の下落にもよるのだから、と。(Ricardo 1951-73, II, 150)

このリカードウの指摘は全く正しい。しばしばマルサスの議論に明快さが欠けた理由の一端はここにある。すなわち、通貨の減価という金融政策上の論点と、本位の価値変化が経済に及ぼす影響とは、明確に区別されて然るべきだったのだ。

だがマルサスは、金兌換性に対して最終的にある立場を固めたように思われる。すなわち、たとえ金の増価が進行し、物価下落が生じてすら、1819年の法的措置（ピール条例）は正しかったのであり、われわれが——地主たちですら——その結果を甘受するのは全く公正なのである。

……この通貨の価値の上昇は、これを農産物の下落で測定しようとする人々が考えがちなほど著しいものでは決してなかった。また、これを金紙の開きだけで測定しようとする人々が想像するほど軽微でもない。だが、この開きがイングランド銀行の支払制限および現金支払への復帰に正しく帰せられるものすべてであろうと、なかろうと、それは変化しなかった物と比較された場合には、通貨の価値に生じた変化の全部では決してないかもしれない。……金紙の開きを上回る通貨の価値変動が、どの程度までイングランド銀行正貨支払制限条例および正貨支払制度への復帰に帰せられるかは、なかなか簡単にはいえない。……だが、平和回復後の土地所有者に対する重圧がどのようなものであれ、公債保有者を犠牲にして償いを求めようとする試みに対しては、彼らには少しの弁解も成り立たない。運はめぐり合わせであるから、あらゆる党派は公明正大に振舞うべきである。どんな階級の人でも、不正な恥ずべき手段を講じて、他を陥れ、自己の繁栄を図ることは正当化され得ない。(Malthus 1823a, 214, 220/訳 62-3, 73)

こうしたマルサスの立場は、私が別稿（佐藤 1999, 24）で指摘した通貨学派の社会に対する静態的なヴィジョンに近いという印象を与える。

#### IV. 3 主題の変化

マルサスは、1811年以来、物価騰貴が経済に与える活況を強調し続けた。それは、強制貯蓄によって収入から資本を生み出す過程であり、生産を刺激する動因であった。

だが『原理』では、マルサスはまさにこの過程に強い疑問を抱く。おそらくはバーミング学派のインフレ案を念頭におきつつ、彼は安易な通貨創造を次のように批判する。

ことによると突然の通貨の増加と新たな借入れの便宜とはどんな事情のもとでも取引に一時的刺激を与えるかもしれないが、しかしそれは一時的なものに過ぎないだろう。政府の側での大きな支出と、資本の収入へのたびたびの転換とがなければ、資本家が獲得する大きな生産力は、固定所得の所有者がもつ購買力の減少に作用して、現在感じられているものよりさらに大きな諸商品の供給過剰を引き起こさずにはおかないだろう。(Pullen 1989, I, 514. 強調は追加)

今や力点は、通貨による資本創造から、資本の収入（不生産的消費）への転換へと移ったのだ。[[『原理』での] インフレ案への批判の背後には、貯蓄と需要とについてのマルサスの全概念があった。新たな紙券発行はひょっとして一時的に雇用と生産との増大をもたらすかもしれない] (Link 1959, 67. [ ] 内は追加)。マルサスは、インフレーションによる過剰資本と供給過剰との創出をおそれたのである。なるほどマルサスは、初期からインフレ政策による強制貯蓄実現には慎重な態度を見せてはいた。<sup>(29)</sup>だが今や、「そのような事態を願うのは、それを直す自然の力とわざを見るために怪我を願うようなものだと思う」(Malthus 1823b, 252) と主張する。そして『原理』第2版(1836)ではいう。

だが、貨幣価値の下落から時に生ずる利益について語る場合、常に想起されねばならないのは、……地主、資本家、労働者というすべての関係当事者によって、あまりに苦痛な逆転なので、初めからその刺激を受けない方がましだったとたぶん感じられるような、逆行する動きを確実にもたらすということだ。(Pullen 1989, II, 166. 強調は追加)

こうして『原理』においては、不生産的消費の称揚とともに、強制貯蓄論は完全に背後に退いたのである。

## V. おわりに

なるほどマルサスは、彼の『経済学原理』の中で力強く断言した。

経済学における理論家たちは、貨幣に重きをおき過ぎると見られるのを恐れて、おそらく、その推論において貨幣を度外視しがちであった。われわれが欲するのは商品であって貨幣ではないというのは、抽象的には正しい。だが実は、それと引換えにわれわれの財を即座に売ることができないような商品は、流通媒介物の適切な代用物になり得ないし、また同様に、子供たちを養ったり、地所を買ったり、労働や今後1、2年の食糧やを支配させたりしてはくれないのである。そして製造業者ですら、仮に彼の労働者の賃金すべてを現物で蓄積せざるを得ないとすれば、遅々としてしかやってゆけないだろう。従って、われわれは、彼が他の財よりむしろ貨幣を欲することには別に驚かない。しかも文明諸国においては、農業者も製造業者も自らの生産物売って貨幣で測った利潤を得ることができなければ彼の勤労は直ちに弛緩するだろう、とわれわれは確信してよい。流通媒介物は、富の分配と勤労の奨励とにおいてきわめて重要な役割を担っているのだから、われわれの推論においてこれを除外することは、われわれをしばしば誤らせることになるだろう。(Pullen 1989, I, 361 n.)

---

(28) マルサスは、税によってファイナンスされた政府支出と、民間もしくはイングランド銀行からの借入れによってファイナンスされた政府支出とを全く区別せずに、ともに称揚する (Pullen 1989, I, 373-74, 479-80)。Link (1959, 62-65) を見よ。

(29) 「わが国の破産した商人たちや、困窮した製造業者たちや、資本および収入が最近被ってきた厳しい妨げや、その [物価高騰の] 刺激の最初の適用においてすら、それはあまりに大きな服用量で投与されたことを十分に証明するのではないか？」(Malthus 1811b, 75. [ ] 内は追加)

だが繰り返すが、マルサスは彼の『原理』に独立した「貨幣」章を設けなかったし、上の引用文もやや孤立的な文脈で現れた。それどころかマルサスは、1811年の2つの貨幣論文を除けば、もっぱら貨幣を主題とした論文もパンフレットも書くことはなかった。

本稿が示したようにマルサスの貨幣理論には、初期の著作以来、貨幣の中立性命題、強制貯蓄論、物価・正貨流出入メカニズムといったヒュームの数量説を直接に敷衍した理論が一方にあった。だが他方で彼には、移転支出効果論から始まる商品需給分析に由来した、需要によって決定される物価が貨幣に先行するという若干曖昧な理論があり、この中で地方銀行のインフレーション責任問題についての不整合な主張もなされた。私は、(彼自身決して整合させる努力をしなかった) これら2つの系列の理論の存在が、研究者たちに困惑を与え彼の貨幣理論の真剣な検討を回避させてきたのは当然であったと考えざるを得ない。<sup>(30)</sup>

だが、マルサスの貨幣理論の正確な理解は、古典派貨幣理論が真に主張したこととしなかったこととを識別する重要な試金石となるだろう。厳格な数量説を用いてこそ、マルサスはスミスのヒューム批判を反批判し、リカードウの国際調整論を批判したのであった。それどころか、彼の貨幣理論は、スミス＝リカードウによる古典派貨幣理論の発展にとって無視し得ない数量説からの挑戦であったと見なせるだろう。少なくともリカードウは、それに正面から対峙することを余儀なくされたのである。

またヴァイナーによる「穏健な地金主義者」マルサスという形容は、二重に研究者たちを惑わしてきたといえるだろう。なぜなら第1に、マルサスは厳格な物価・正貨流出入メカニズムによってこそリカードウを批判していたからであり、第2に、ヴァイナーによる形容はマルサスが最終的に到達した立場——永続的な金の増価と物価下落とを予期しながら、だが金本位制という国際的な共通本位の一層の確立を願いつつ、兌換性を強固に守り、紙券増発によるいかなるインフレ政策をも拒絶した立場——を曇らせるからである。そしてこのマルサスの立場は、(もちろんヴァイナーは否定するだろうが) 彼の友人にして論敵リカードウの貨幣理論の柔軟性をかえって際立たせるもののように思われる。<sup>(31)</sup>

私は、本稿でマルサス貨幣理論解釈の1つの型を提示しただけに過ぎないかもしれない。それゆえ私は、今後彼の貨幣理論への関心が一層高まり、それによって古典派貨幣理論の真の発展史が一層解明されることを望んでやまない。

(富山国際大学人文社会学部助教授)

---

(30) 私は、ホーナーがマルサスのニューアナム書評論文に対して漏らした感想を、マルサスの貨幣理論に対しても抱かざるを得ない。「私は、あなたが、私が既に言及しましたマルサスのすべての著作物に影響を与えている欠陥をこの書評の中に見出されることと存じます。それは、自らの諸原理の申し立てにおける正確さと、彼がそれらから跡づける諸結果を支える際のはっきりとした明快さとの欠如です。」(1808年10月27日付 J.A. マリ宛, Horner 1994, 497)

(31) リカードウの貨幣理論がもつ種々の柔軟性に関しては、佐藤(1999)を見よ。



## 引用文献一覧

- 佐藤有史 (1999). 『現金支払再開の政治学——リカードウの地金支払案および国立銀行設立案の再考——』 *Study Series* No. 41 (一橋大学社会科学古典資料センター).
- . (2002). 「アダム・スミスと正貨流出入メカニズム」 大友敏明・池田幸弘・佐藤有史編 『経済思想にみる貨幣と金融』 三嶺書房, 所収.
- 中西泰之 (1997). 『人口学と経済学——トマス・ロバート・マルサス——』 日本経済評論社.
- 中村廣治 (1975). 『リカードウ体系』 ミネルヴァ書房.
- . (1999). 「リカードウ「地金案」考」 『熊本学園大学経済論集』 5/3・4: 51-76.
- 羽鳥卓也 (1999). 「マルサス『人口論』における労働貧民の状態」 『熊本学園大学経済論集』 5/3・4: 5-32.
- 山下 博 (1965). 「地金論争におけるマルサス」 『経済学における古典と近代』 (岸本誠二郎博士還暦記念論文集) 日本評論社, pp. 137-68.
- 渡会勝義 (1997). 『マルサスの経済思想における貧困問題』 *Study Series* No. 38 (一橋大学社会科学古典資料センター).
- Bonar, J. (1924). *Malthus and His Work*. 2nd edn. London: George Allen & Unwin.
- Cannan, E. (1917). *A History of the Theories of Production and Distribution in English Political Economy 1776-1848*. 3rd edn. London: P.S. King and Son.
- Fetter, F.W. (1965). *The Development of British Monetary Orthodoxy, 1797-1875*. Cambridge, Mass.: Harvard Univ. Press.
- Girton, L., and Roper, D. (1978). 'J. Laurence Laughlin and the Quantity Theory of Money.' *Journal of Political Economy* 84/4: 599-625.
- Glasner, D. (1989). 'On Some Classical Monetary Controversies.' *History of Political Economy* 21/2: 201-29.
- . (2000). 'Classical Monetary Theory and the Quantity Theory.' *History of Political Economy* 32/1: 39-59.
- Gomes, L. (1993). *The International Adjustment Mechanism*. London: Macmillan.
- Hansson, B. (1987). 'Forced Saving.' In pp. 398-400 of vol. 2 of *The New Palgrave: A Dictionary of Economics*, ed. J. Eatwell, M. Milgate and P. Newman, 4 vols. London: Macmillan.
- Hayek, F.A. von (1935). *Prices and Production*. 2nd edn. London: Routledge and Kegan Paul. 谷口洋志訳 『価格と生産』, 『ハイエク全集 I』 春秋社 (1988) 所収.
- Hollander, S. (1997). *The Economics of Thomas Robert Malthus*. Toronto: Univ. of Toronto Press.
- Horner, F. (1994). *The Horner Papers: Selections from the Letters and Miscellaneous Writings of Francis Horner, M.P., 1795-1817*, ed. K. Bourne and W.B. Taylor. Edinburgh: Edinburgh Univ. Press.
- Humphrey, T.H. and Keleher, R.E. (1982). *The Monetary Approach to the Balance of Payments, Exchange Rates, and World Inflation*. New York: Praeger.
- James, P. (ed.) (1966). *The Travel Diaries of Thomas Robert Malthus*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- . (ed.) (1989). *T.R. Malthus: An Essay on the Principle of Population*, variorum edn, 2 vols. Cambridge: Cambridge Univ. Press. 吉田秀夫訳 『各版対照・人口論』 春秋社 (1948-49), 全4巻.
- Johnson, H.G. (1949). 'Malthus on the High Price of Provisions.' *Canadian Journal of Economics and Political Science*, 15: 190-202. As reprinted in pp. 59-72 of vol.IV of *Thomas Robert Malthus: Critical Assessments*, ed. J.C. Wood, 4 vols. London: Croom Helm, 1986.

- Keynes, J.M. (1972[1933]). *Essays in Biography*. As vol.X of *The Collected Writings of John Maynard Keynes*, ed. D.E. Moggridge. London: Macmillan. 大野忠男訳『人物評伝（ケインズ全集第10巻）』東洋経済新報社（1980）.
- King, Lord P. (1804). *Thoughts on the Effects of the Bank Restrictions*. 2nd edn. London: Cadell & Davies, J. Debrett.
- Laidler, D. (1999). *Fabricating the Keynesian Revolution*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Laughlin, J.L. (1903). *The Principles of Money*. New York: Charles Scribner's Son.
- Link, R.G. (1959). *English Theories of Economic Fluctuations 1815-1848*. New York: Columbia Univ. Press.
- McCulloch, J.R. (1845). *The Literature of Political Economy*. London: Longman, Brown, Green, and Longmans.
- . (1854). *A Treatise on the Circumstances which Determine the Rate of Wages and Condition of the Labouring Classes*. 2nd edn. London: G. Routledge and Co.
- Malthus, T.R. (1798). *An Essay on the Principle of Population*. As in *Works of Malthus, I*. 永井義雄訳『人口論』中公文庫（1973）.
- . (1800). *An Investigation of the Cause of the Present High Price of Provisions*. In *Works of Malthus, VII*: 5-18.
- . (1811a). 'Depreciation of Paper Money.' *Edinburgh Review* 17/34 (February): 339-72. In *Works of Malthus, VII*: 21-56. 溝川喜一訳「マルサスの物価変動論（1），（2）」『甲南論集』4/4(1957) : 77-94, 5/2(1957) : 84-103.
- . (1811b). 'Pamphlets on the Bullion Question.' *Edinburgh Review* 18/36 (August): 448-70. In *Works of Malthus, VII*: 57-82.
- . (1815a). *An Inquiry into the Nature and Progress of Rent*. In *Works of Malthus, VII*: 115-45. 鈴木鴻一郎訳『マルサス穀物条例論——地代論——』改造文庫（1939）所収.
- . (1815b). *The Grounds of an Opinion on the Policy of Restricting the Importation of Foreign Corn*. In *Works of Malthus, VII*: 151-74. 鈴木鴻一郎訳『マルサス穀物条例論——地代論——』改造文庫（1939）所収.
- . (1823a). *The Measure of Value Stated and Illustrated*. In *Works of Malthus, VII*: 179-221. 玉野井芳郎訳『価値尺度論』岩波文庫（1949）.
- . (1823b). 'High and Low Prices.' *Quarterly Review* 29/57 (April): 214-39. In *Works of Malthus, VII*: 225-53.
- . (1986). *The Works of Thomas Robert Malthus*, ed. E.A. Wrigley and D. Souden, 8 vols. London: William Pickering.
- . (1997). *T.R. Malthus: The Unpublished Papers in the Collection of Kanto Gakuen University*, vol. I, ed. J. Pullen and T.H. Parry. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Marcuzzo, M.C., and Rosselli, A. (1991). *Ricardo and the Gold Standard*, trans. J. Hall. London: Macmillan.
- Mayer, T. (1980). 'David Hume and Monetarism.' *Quarterly Journal of Economics* 95/1: 89-101.
- Morgan, E.V. (1943). *The Theory and Practice of Central Banking 1797-1913*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- O'Brien, D.P. (1975). *The Classical Economists*. Oxford: Clarendon Press.
- Pullen, J. (ed.) (1989). *T.R. Malthus: Principles of Political of Economy*, variorum edn, 2 vols. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Ricardo, D. (1951-73). *The Works and Correspondence of David Ricardo*, ed. P. Sraffa with the collaboration of M.H. Dobb, 11 vols. 日本語版「リカードウ全集」刊行委員会訳『リカードウ

- 全集』雄松堂（1969-99），全11卷。
- . (1992). *David Ricardo: Notes on Malthus's 'Measure of Value'*, ed. P.L. Porta. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Smith, A. (1976[1776]). *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, ed. R.H. Campbell and A.S. Skinner, 2 vols. Oxford: Clarendon Press. 大河内一男監訳『国富論』中公文庫（1978），全3巻。
- Sowell, T. (1972). *Say's Law*. Princeton, N.J.: Princeton Univ. Press.
- Thornton, H. (1939[1802]). *An Enquiry into the Nature and Effects of the Paper Credit of Great Britain*, ed. with an introduction by F.A. von Hayek. London: George Allen & Unwin. 渡辺佐平・杉本俊朗訳『紙券信用論』実業之日本社（1948）。
- Viner, J. (1924). *Canada's Balance of International Indebtedness 1900-1913*. Cambridge, Mass.: Harvard Univ. Press.
- . (1937). *Studies in the Theory of International Trade*. New York: Harper & Brothers.
- Vint, J. (1994). *Capital and Wages*. Aldershot: Edward Elgar.
- Walker, F.A. (1878). *Money*. New York: Henry Holt & Co.
- Wheatley, J. (1807). *An Essay on the Theory of Money and Principles of Commerce*. Vol. I. London: T. Cadell and W. Davies.